



ホ 2
1214
2



丁未 2
號 1214
卷 2



禁止辭

上なる用言のうへふそはてて。禁め止る辭なり。そは諸の用
言ども。作用あるまつきて。又そをて禁め止むる辭のかふ
らず。無くていえらぬまごふまじなり。いひ抄に何ふと
か何るとい。大む祿勿莫の字にころる似るべし。譬へば
といまるべき人れ。行くといさむる。ゆくふまて。東又行く
べき人れ。西又行と禁め。明日ゆくべき。今日行くといさむ
るたぐひい。ふ行そなりと有るぞ然る更なる。さてこの何ふ
ハ用言の第四段なる。續體言に下ふといふ辭を加へて。い
くふおすふとやういふが定まらぬ。何そハ用言の

○ことばのちつとら

禁止辭

上四十

酒井氏



第二段ふる。續用言は上。おもと置き。下よそといふ辞と
加へて。おもとそかかしてとやうにいふが定まらり。さて
か何そといふ辞と。近れせれ人の何そとのいへる。い
とさひが事か。こゝれか勿れ。定義ふる事いたも知ま
るおとく。下かるる。其とさす辞か。この故。下よるを
ハ省くとも。上よるおも省きてハ禁め止むること。バよ
からぬ小よ。古書ハハ何とのいひて。おもとささ
いと多う。ま。何かやめゆめ何か。何そもゆめか何るか
く何そもかど。ま。とくこゝれ二つよ。轉用せるか。と
知るべし。

助辞

すべての詞の最初。ま。中間。ま。最後。添いでて助辞とい
ふもの。其用ハ何の爲なる。考ふる。その語意を
たすけ。その旨趣を強くさ。え。む。さ。ま。ん。ら。け
る。然ま。各。み。ろ。と。異。小。おも。ぶ。と。と。別。て。る。あ。る。べ。し
と。世。の。人。の。事。と。ハ。心。づ。う。ぬ。げ。よ。て。譬。へ。ば。と。と。さ。地
と。い。ひ。ミ。熊。野。と。熊。野。か。ど。い。ひ。う。へ。て。も。ど。も。小。意。趣。よ
ら。づ。う。ら。祢。バ。ひ。と。つ。事。か。と。や。う。思。ひ。た。め。る。ハ。い。と
く。鹿。漏。る。ま。ざ。か。り。け。お。の。ま。年。ご。ろ。此。事。ふ。お。と。つ
けて。古。人。た。ち。の。思。兼。ら。つ。ま。さ。ろ。用。ひ。と。見。得。さ。る。小。よ。

その徴と説とい語彙委しく記さつたると。今この捷徑
とせるは因キミ小おりの出るまふ。その大略アラマシといごして
さくろおどろろさんと云。

○詞の最初有る助辞。

かカ青ふる玉藻沖つ藻。手放きもをちもかやす。おどの

かカる。さて此かハ彼の義にて。そおとふるとのをとつ

う小見ていふ辞イハお。六の故イハ辞のイハかも。その意よる

つて疑といふまをけ。

けケけうと。けどほ。おどのけお。さて此けハ氣の義

て。物の芽キサと。いらうドめよとらていふお。

さサさむら。谷ヤ蟻アリさわとるおといふさお。さて此さハ

狭カの義よて。廣カさ小對カへま多カさ小對カへて。その物と事

とと取せばめて。その純粹モハラとらる方とさ辞お。

志シ本年の志折りのまらうへて。若草のおもひシなへてお

といふ志お。さて此志ハ古書シ其シとシといつると同

義よて。たシら小其シとシうごくまシくさシとる辞お。

たタたもとや。吾タいぞこふる。玉タ矛タのまタちタをタたタ遠タさタおどい

ふたお。詞タ玉タ緒タ。たタハ回タの意よても有るべし。回タハ

むタとも活用ハタラさて回タ行タくやうの意お。運タ字タ轉タ字タおと

ともかけタとるが如し。

ま 玉つく尾張の國マますげよー蕪我の子等マおどいふま
おマさて此マ真マの義マよてものく正中マとマナカとい
ふが如くその物の徧カタよらばよく足マとくのをマて不
足カタところおさといふ辞マおマ。

み ところの梓ミの弓ミさむらひ御笠とまミせおどめ
おミさて此ミみミその物と目ミて見ミこころもて任ミか
と、事物ウツロの空虚ウツロおらぬ方ミよミさす辞ミおる故ミよ。それよミ
轉ウツリ用ウツリてハ、御ミ基ミといひて尊ウツリ稱ウツリとおミきるも。ともお事物ウツロの
空虚ウツロおらぬ方ミよミいふおミ。

や 下ヤがとくやヤがとく取ヤらせやヤよや待ヤて山郭公ことづて

んおどいふやヤおヤ。さて此ヤやい言語四種論ヤトモニヨ
ブ聲ナリといへる理ヤいさる事おがら。その義ヤわか
て見る小彌ヤまヤと矢ヤの義ヤよて其事理を貫ぬさて。はよく
指ヤす方ヤいふ辞ヤおるべくおもヤいる。

い ところすも御木の棹橋イ白雲もいイゆさむぐうイおど
のいイおイ。さて此イいイ射イの義イよて的イ當イとするところ有
りていふ辞イおイ。

を 二並ヲもの筑波山ヲぬきてをゆるんおどれをおヲ。さて
此ヲをい長ヲの義ヲよて事物のをさヲくヲきとめていふ
辞ヲおヲ。

○詞の中間ナカラに有る助辞

名小ナノコ「おはど」たまタマ「うもあどは」よて名小ナノコ「い俗」
名ニツレといふころ。たまタマ「ハタレカツレ」の意ある
事初の「お同ト」。

ら「憶良らオモヨシ「今もまうらん」くク「すつらん絶綿らツツラン「いもあ
といふらオモヨシ。さて此らココノ「等」の義よてその一つと言ひ
てその餘の等類ともうぬる辞あり。

ろ「たふとタフとトろロもモ「かかカカとトろロもモあどアトのろロあり。さて此
ろロ「上あるらウヘニ「小等コナリ」の義ある事ハ大同オナジうウきキどト小
異イ「り」で。有アの義の含フ「たるらんとおぼゆるあり。この

故ユ「たふとタフとトろロもモ「貴ウツクシく有る哉カよてよく通キえエかカ
「たろタロろロもモ「哀アハレく有る哉カよてよく通キゆるユあり。

○詞の最後ヲハリに有る助辞

さ「うウきキとトさサ「かかカカとトさサあどアトいふイフさサあり。さて此ココ「ハ形状言
久活志久活キウカクシキウカクと轉マ「受さるおがら。その意用ひを
すでは上ウヘ「いへるさサお同オナジやヤ」

ふ「山ヤマざくら咲サキけらケラ「花ハナのノいろイロはハうウつツまマ「けケあり
といふイフあり。さて此ココ「うウちチあアらラわワてテいふイフ辞ジあるこ
と。絶定言運用活字の下シ「いへる」。

糸「ゆユをヲ糸イトふフといふイフ糸イトあり。さて此ココ「糸イト」去キの義よて

○ことばのちりちり 助辞

變格活奈行の屬にて指揮の辞とあるも。尚續用言
又指揮辞は運用活字の下といへり。

み

月清^ミ山たり^ミふといふ^ミか^ミ。さて此みの義は上
いへるが如く。その事物の空虚^{クウ}からぬ方よといふ辞か
るがゆゑ。俗に某サニといふことろよなる事。玉霞か
ど小見えたるが如く。か^ミは運用活字は下小もいへり。

も

く^ミま^ミか^ミる^ミふ^ミも^ミか^ミ。さて此もの義は係
辞もの條よと絶定言運用活字は下といへるがゆゑとく
みきもか^ミがめ辞か^ミ。また「ひ^ミ君い^ミも^ミふ^ミぢ袴^ミぞも^ミか^ミ
といへるも。大うと同意にていへり。

や

あ^ヤづ^ヤま^ヤや^ヤま^ヤた^ヤい^ヤび^ヤこ^ヤや^ヤか^ヤど^ヤい^ヤふ^ヤか^ヤ。さて
此や^ヤは上よ志るせる如く。彌^ヤま^ヤと矢^ヤの義にて其事を歎^ヤ
息^ヤく^ヤら^ヤま^ヤに。その意を剛^ヤく^ヤ重^ヤる^ヤ辞か^ヤ。

よ

ま^ヨす^ヨげ^ヨよ^ヨま^ヨせ^ヨけ^ヨ中^ヨに^ヨ住^ヨむ^ヨわ^ヨび^ヨぬ^ヨと^ヨよ^ヨか^ヨど^ヨの^ヨ類^ヨひ^ヨ
よ^ヨか^ヨ。さて此よ^ヨは^ヨ令^ヨする^ヨ言^ヨか^ヨること^ヨ已^ヨ小^ヨ指^ヨ揮^ヨ辞^ヨ運^ヨ用^ヨ
活字の下といへり。

を

わ^ヲか^ヲに^ヲや^ヲい^ヲえ^ヲと^ヲこ^ヲよ^ヲ。八^ヲ重^ヲ垣^ヲつ^ヲく^ヲる^ヲ其^ヲ八^ヲ重^ヲ垣^ヲと^ヲよ^ヲか^ヲど
い^ヲふ^ヲを^ヲか^ヲ。さてよ^ヲま^ヲら^ヲの^ヲを^ヲい^ヲ。その事をさ^ヲく^ヲく^ヲく^ヲ
と^ヲく^ヲの^ヲか^ヲで^ヲて^ヲめ^ヲた^ヲさ^ヲよ^ヲか^ヲる^ヲ事^ヲ。上^ヲよ^ヲい^ヲへ^ヲる^ヲが^ヲ如^ヲく。
かく^ヲれ^ヲど^ヲく^ヲ其^ヲれ^ヲく^ヲべ^ヲき^ヲ所^ヲ。定^ヲま^ヲる^ヲ位^ヲの^ヲ有^ヲり^ヲて。上^ヲを^ヲり^ヲ。

小置て中下は用ひ難き有也。中より用ひて上下はか
りまぬ有也。下小のいつうひて上中はいふつよおろざるか
ど。種々あるが。それ意味もまことさまじくまで。稱美とあて
譽めたくふる辞とある有也。尊稱とあてて崇まへたふとぶ
辞とある有也。歎息とあててその事を深く思ひいれて。打か
げくつまで小言よ出て得も言ひえらぬ餘韻を添ふる辞と
ある有也。甚も奇しく異しきもの小かんらてけるが
此助辞よつきてはいえまほしき事どもいと多かきども
くごくくくもの一たらむまは。中くは初くは筆かどの
為は。まどいと事もころとてと漏一つ。

係辞

かして小をはとい。紐鏡ある結辞と三條なれて。其か
ら右行は。はも徒中行は。疑。左行はこそその辞どもま
かして此は上よ言ひ下したる物事。中よすぐれて重く
止事かきと撰分其專要と有るもの一つと取出て。下から結
辞小うちあはせんためよかん有ける。是小よて微細ある
まろ用ひも何もうましく知らるゝとざかれバ。よく古よ
用ひ來たる例と尋ねて。深く考へものすべくかん。さてこ
小はも徒や疑こそその七つと出して。のやハぶけるハ。のハ
係辞よらば。此と彼と離るるものと連絡接くる辞あり。

○ことばのらうとら

係辞

大の故は、伸縮もぞや疑ふ。そと重か。ていふもども。そのむす
びいぞや疑ふ。よて結ふ。よても炳焉。然もべのよて結
べる。いりふと考る。詞玉緒。いぞされたる。變格といふ
類。よて。終の句は歎息の意。て。留の下。か。よ。よ
や。か。どいふ辞を加へてさくべ。れぞ多り。ける。これよ。よ
て。志むらく。ふ。小。省。さ。つ。か。後の人。め。さ。だ。め。と。ま。つ。
は。

此は、續體言ま。と體言よ。て受けて。此と彼とを言分つ
時。係辞。も。其證例を言。ば。春。の。ど。け。夏。の。つ。一
秋。の。す。ぎ。冬。の。さ。む。い。ふ。と。あ。る。此。と。何。故。と

言分つ辞といふ。ふも。夏秋冬。の。有れども。中。長閑さ
の。春。も。秋。冬。春。の。有れども。中。暑さ。夏。も。人。の。言
へども。我。の。言。は。ず。人。の。行。け。ども。我。の。行。う。ず。か。と。人。と
我。と。を。言。ひ。分。ち。春。と。夏。と。を。言。ひ。分。ち。ま。と。い。く。千。萬。と
あ。く。多。う。る。物。事。中。よ。て。も。そ。ま。は。こ。れ。ハ。と。い。ひ。分。つ
辞。も。○。ま。た。此。は。濁。る。時。ハ。い。と。く。辞。の。意。か。は。る。か
了。詞。玉。緒。濁。る。は。既。然。事。と。い。ふ。と。未。然。事。を。か
祢。て。い。ふ。と。の。二。つ。の。で。既。然。事。と。い。ふ。ハ。花。さ。け。ハ
月。い。ま。ば。か。ど。の。如。し。未。然。事。を。か。祢。て。い。ふ。ハ。花。さ。ら。ハ
月。い。ら。ば。か。ど。の。如。し。と。い。と。き。た。る。此。と。用。言。ま。し。將
然。言。續。用。言。の。運。用

○ことばのらうらう 係辞 上四十七

活字の下よ。大まきと俗言よていふ時ハ花さけバ月いさ
既云々。バ花ガ咲タサカイニ月ガ入タサカイニまた花さ
ハ月いらバ花ガ咲タサカイニ月ガ入タサカイニおといふ
どけ差異ケガレある。

も

此もハ續體言よ體言よ受て此又彼と兼合する時
ハ係辞ある。其證例と言ハ。此春もけけ此夏もけ
つこれハ去年の春もけけ去年の夏も熱う此夏もけけ此夏もけけ
れとこれと兼合人もいひ我もいふ人も行き我も行く
せていふも兼合人もいひ我もいふ人も行き我も行く
かやうは物二つ兼合せていふよ。いく千萬とよく多

徒

うる物事とも兼合カキせて言ふ辞ある。また物二ついひあ
らべずして。只一つある時もそれと此と物二つある心
よていへる有る。それハ其まゝと得て見る事ある。た
とへバ古今小いつまてり野べよこころねわくがれん
花散らずハ千代もへぬべよとあるうとれこころよ
て味ハ一知るべよ。

すべて歌も文もそれ所よて。語めさるこ小よ。そ
ハ趣意通ずることある。されバ絶定言ハ用言の下小も
いへるが如く。此辞よてされてそれ事ハ決著するよ。係

○ことバのらうらうら 係辞

辞ふくてももとよ切きすわる事あり。さて此徒一屬
 さてその格よて結ぶ辞四つありてふをへふもあり。つ
 いでふいささり其義ととくべし。○てハ下二段多行の
 辞よて續用言、運用活字あり。故に體言いうけだ。小と相
心得。小て詞玉緒云上よをと係ず。ざしてのてハ將
 然言、運用活字あり。故に體言いうけだ。大田豊年云い
アこれいといてさうばうてふどいふ詞のずい
せよアとるよてずの濁ア。ていうつア。てでハ濁るふ
ア。詞玉緒云此はハふんふどいふも同屬あり。○
よ。ひとつよて。去の轉トとるあり。
 二ハ變格活奈、行の辞あり。てと相對てこ さて續用言よ
ア受るハかくれぶとく。ふよぬぬるぬれと活くと續體

言また體言よて受るハ活用かきるア。○をハ物とつづ
 糸のとするふをといふものあり。其意よて此物といひ
 て其事につが糸合せ。其事といひて此物につが糸合す
 る辞あり。故に續體言よと體言ぞや何こそけ辞よても
 法よくあり。○ハハ小といふも同格よて少異あり。たと
 へば、ちのくく小もらきつくく小もらき。其ところをさ
 して京よて旅立タビタチする時。まとい其道中よて云とさへ。こ
 ちのくへまりアける人よづくへ行とて。明石のうら
 よてふどいふあり。既よ其所よ至アていふ時ハ。住よ
 小まうで龍門。まうでふどいふあり。みまらと以

○ことばのらうらうら 係辞

て小とへとの用ひやうとあるべし。何ゆひ抄は其所に
いまど至らばして其かたとさして行意かるとある小
同。

此がハ数あるものの中これひとつとさしめてさす辞か
ま。おほくその下と見合はべし。おもは辞あるが故。詞
玉、緒小がいと結べるうた多くして。んととぬる類の
歌ハおのづから多うらば。又や何かどハ疑ふ辞あるゆ
ゑ。おのづからんととぬるうた多くして。るとむすぶ
類ハすくお。おまおのづからよまきたるものおま

ら

おのやハ数あるものの中のおとつとらたがひさす辞
か。此故に古くよ疑のやといひからへ。さてこの
辞のいさくらかろさとかともいへ。詞、玉緒はすべて
かハやハ似たる辞にて。やと通ハいひてよは所も多
し。故に萬葉ハやといふべき所をかといへる類多し。
されど又かからばやといふべき所と必かといふべき
所とたしうお分きたるも多し。みどまハつらひらた
しとら。又がと濁る辞はそれハのハ通ふ辞あれば

疑

此類よりらば、續體言運用活字の下より一也。

大く小疑といへるは、詞、玉、緒、よ、おに、おど、おぞ、たま、たが
い、う、小、い、お、ど、い、う、で、い、づ、き、い、づ、ら、い、つ、い、く、お、ど、の、類。
皆て小をそれ結び、格同トれ故也。一つ小合せて、何の
部とすといへるは、お、ま、よ、て、物、事、ハ、分、量、と、さ、う、マ、ら
ら、ま、す、よ、其、ほ、ど、ハ、計、ヲ、難、き、よ、り、結、辞、の、括、を、ま、つ、辞、お
も、さ、て、此、お、よ、お、ど、た、ま、い、う、で、お、ど、い、ふ、辞、と、上、よ、お、さ
て、其、下、の、結、辞、と、の、お、う、ら、よ、か、も、ト、と、さ、む、が、さ、だ、ま
る、よ、て、や、も、ト、ハ、を、さ、く、と、さ、ま、ぬ、大、と、お、も、さ、れ、ど、や

といふ格も何れで、おど、そ、う、お、る、定、ま、り、何、等、の
下、よ、や、と、そ、つ、て、い、ふ、格、ハ、お、ど、や、お、ぞ、や、い、う、小、ぞ、や、い
う、お、ま、よ、お、ど、お、ぞ、詞、玉、緒、小、大、何、等、下、ハ、お、ま、か
と、受、る、例、お、る、小、右、ハ、お、と、く、お、ど、と、お、ぞ、と、ハ、二、つ、お、ま、
や、と、受、る、例、お、り、そ、れ、中、よ、お、ど、ハ、か、と、受、る、が、多、く、一、て
や、と、受、と、る、ハ、い、と、す、く、お、し、お、ぞ、ハ、や、と、受、る、例、の、よ、
て、か、と、受、る、こ、と、お、し、と、お、り、也、○又、上、小、何、等、を、お、さ、て、下
ハ、結、と、お、間、小、お、ま、や、と、お、く、例、お、り、お、お、ま、ま、や、い、お、ま、ま、
や、お、ど、お、ぞ、詞、玉、緒、よ、右、の、お、ま、や、ハ、皆、上、よ、た、が、い、く、何、お
ど、い、ふ、辞、と、お、さ、て、下、と、そ、の、結、び、よ、て、と、ぢ、め、ら、る、中、間

小のりやもトをむかへて見まば心得やす」とあり。
○又かにまきやといひて語れざる格あり。詞、玉緒、
右にまきやハ皆上ニ何おどいふ辞ありてやよて切る、
お。故、下ハ何や結よかゝらば。さて夫のおよ
まきやハおになるぞお。いりおきやハいりふるぞとい
ふ意おとあり。○またや何何やと何の上ニやをそへ
何の下ニやをそへていふ格あり。やと上ニそへていふ
ハぬーやたきたてるやいづこおどまやと下ニつけ
ていふハおどやまらおどやおどいふたぐひ也。○又何
お下ニもとうくるあり。いづくもいくらもおどかり。詞、

玉緒小もとうくるとおハ。其下結よかゝらば」とい
おれたるがぶとく。おとよていもの意おもさ小よ。其
結もとも徒の結びニ屬。詞、玉緒小凡ていくと云辞初
學ハ輩ハ。こぞ小いく千年。いく萬代おどいひて。た
ど多きこと久しおとく心得たるハひが事お。いく
ハ疑お辞おまば。たぐいく千代ぞと千代の數を問こと
をお。いく千代もといへをも小て久しお意おあるま
る。たとへばいく千代よほへ菊お花といひてハ。いくお
辞うおハ。いく千世もおほへといへばよろしお。お
すべて此けぢめをよくおまへて。ほうふべき辞お。

○この本のうちまじり 係辞

とらて。

こそ

おのこそいかにさく多うるものごとけ中よてすぐ
まておもたてたぐ一つえりいごし。さ極て此其とい
ふ辞あるとその反といふとの二つあり。さてこそハ今
け俗言いふもかのづうら雅言け格をわやまたげ。或
人は説ふこそといふ意をたへていもど。石と玉とい
とつよまどきると指さしてそれぞ玉あるといひ。又手
けひらへててわけて。おまこそ玉おれといふほどけ差
別あり。ぞいひろくこそハせましと心得べし。といへる

小て。大うと心得らるるやうおまど。さやうふのそふも
わらび。せまたけ辞ろと思へびひろけ辞よて。たまもおの
辞をうまく形容して解示したる人あり。さてこそハ
そといひたるまふて。こともおげあるやうおれど。立
歸て。いりある意ぞと尋ねられ。今すこし心ふたらハ
ぬやうおおほえて。ひらめかいひとくことおらぬもの
あり。おまふよて年ごろ意をばけて考へられ。こも
そも二つおがらものをさす辞あり。こハまき。そハそれ
よて。おの辞をかさねていふあるべしとぞおもはるこ
といへるぞ。實に千古の卓説ある。おの意を得てこれハ。

六の辞と用ひたる。所悉く渙然として氷解せばといふ
事あり。○さこそほもこそい。詞玉緒よさぞとありたり
る意と何まども物とほさやうあり。去まらハ詞と上下
してさよさやうはれ意とありてさきば。心得らる
くあり。さもこそれさもく同どうありまよとあり。さもこそい詞
玉緒小もこそハ行末とありたりありて何やぶむ意の辞
あり。は縁のこそと意かひきとあり。ありはことともあ
く。こそれ上よもれそいまるあり。○さて反といふこそ
い。俗よサウコソイウタレ。サウコソ思ウタレといふこ
とろふ。何と辞ありと知るべし。

結辞

むすび辞とい。上ある係辞小ありて其主意と立て指定めたる
事物ハ落成と言ふ辞ありて。用言よと運用活字ハ。絶定言。續
體言。既然言ハ三段ありて。紐鏡ある二轉三轉の辞どもこれあ
り。さて此結辞よ。神代よりいと靈しく奇しくおごさう小
定まざる格ありて。いさうらもらうがて小物すまよとあり。古徹
小よる事と懶がて。或ハ自然のもれと。或ハ助辞ありて
ひて意よらづらばあり。鹿忽と思ひ悔ありて古き例と探
索んものとも。思ひたれぬぞ淺まら。古人たれちハその時世
小有ありて。その俗言と用ひたれまばこそ正しく調ひてあり

けを今よでハ雅言といふむうで沿革まりて有けまべ。いや
けふる今ハ俗言の正一からぬ方よで然いそんハ所謂拘
子定矩といふものよて。つひハ何らぬすぢまおちていふ
うひふるものよねまおでゆくめ。さてそね調ひハ詞玉緒
もて知。そね意ハ古今集遠鏡まらやひ抄おど依。て
明らむべきと。何くまと末書ども多く出来て。中くハ惑ハ
けふる小よで。鈴屋大人ハ遠鏡小照一見て。高山ハ峰の梢
の雲と凌ぎて。目も及びがてふる言の葉と今ハ世のことハ
小味く譯一得つる小よで。おほ人くねとも。折衷一て一つハ
圖とバつくま。そハ同書。初學おどね爲。ハ。註釋ハい

小委一解さたるも。物の味いと甘一辛一と。人ハ語ると聞
たらんやう小。語の勢ハ辞の活用おど。微細ふる趣。至
てハ。猶ハ一ハ小ハえ。何ら祿ハ。其事と今ハおど思ふが如く
ハ。悟得が。これ物ふる。俗言ハ譯一たるハ。たゞ小一づら
らさ思ふ。等一。一ハ物ハの味いと。づらおめて知。まる
が。おとく。古ハ雅言。ハ。己ハ腹の内ハ物と。成ま。一ハ
と。おまらふる心をへ。のた。一ハ小得らる。ことおほ。さそ
う。と。ある小よま。さて此圖ハあるやう八段。ハ。もの一
その第一段ハ諸の結辞。ハ。名目。ハ。某用言と。志るせる
ハ上ふる用言。ハ。某屬と。志るせるハ運用活字。ハ。某行と

○ことばのちつとら 結辞

あるせるハ。その結辞の意を得て目標よりてとる字あり無
活用辞とあるせるハ。轉て用く事あり辞どもあり。この故ニ
紐鏡ハ載られずて詞玉緒よのり出されたり。○第二段第
三段第四段ハ結辞あり。その第二段ハ絶定言
の結辞 第三段ハ續體言あり 紐鏡よ何の中行よて第四段ハ
然言あり 紐鏡よてハ左行ふる さて其屬辞受辞無活用辞
ふどの傍ヨ一二三四五或ハ體とあるせるハ。その辞を受
る體用ハ言の目標あり。一ハ將然言。二ハ續用言。三ハ絶定言
四ハ續體言五ハ然言體ハ體言よてふる事。運用活字圖
よ合せ見てあるべし。○第五段ハその結辞どもの譯ありそ

ハ中小將然ウ續用タふど有るハ。その行の用言と譯辞の上
よす下へまゝして心得しめんとして物したるあり。○第六
段第七段第八段ハ。係辞と結辞とその本末の打合ひは依
て其いさひよて出とる言外の餘韻あり。譬へて四段用言
ハ結辞とて一例と言ひ古今九秋風よほころびぬらし。
藤袴ついでさせてふ。蚕あり。こまの徒がよて結ぶ格か
轉るのよて。其同三暮るうと。見まば明ぬる。夏の夜と。飽
譯ハかむらば。ノテラウカ 結ぶとよのひとあり。後撰 四秋萩
のぞとや。山郭公。結ぶとよのひとあり。後撰 四秋萩
の咲くにもふど。鹿あり。つろふ花ハ。おのが妻あり。れ
ハ疑の辞上よて。むふど。同トありといふ辞ながら係辞
すぶとよのひとあり。

○ことばのちつとら 結辞 上五十六

のさしざま小よでて。結ぶところ別よまて。その意味の大
小かえる事か。心や平うに考ふべし。因にいふ此圖は
向らハせるハ。その正格なるが此三段の結びのさだまて
離きて變格といふものなり。詞玉緒二卷小。其例をいざこれ
て云く。上よぞのや何等の辞とわうびしてぬるつるふるけ
るせるるぬ。不^去過かど結びて。其格よそづまかからて
にをはとくのむべとい聞えぬと。變格とまづ。とあるよて
よく思へば。かか或いよといふ辞といひおこして。とぢめた
るかまけ。何も下よ歎息は意の合まてたるかまべ。その
意して見るべさか。まよ上よ疑の辞とわさて。下よて。と

結びたるわ。後撰戀さ思ひこめつゝ有るもの人よ
る我うそでと秋の紅葉といづまよさ。まよ君戀ふる涙は滯る
といふ絶定言よて。問うくる方あるゆゑ。下よ又やと添
てさく。又つぬと結べるもの。金葉夏の夜の月待つ程の手
意か。又つぬと結べるもの。すさひよ岩もる清水いく結
び。つまよ淡路嶋通ふ千鳥の啼く聲。いく夜杯むね。須
磨の關守ふど有。こまらハ運用活字ある。竟行往行は限
たる事よてまづ。こまらてわさて外ハ見ゆさらば。さて古
の例は向らず。稀ハいと耳たちて聞ぐる。たも多う。こ
歌はうちよも。稀ハいと耳たちて聞ぐる。たも多う。こ
まらハ古人と雖も。その一首中よをさま。難さ。強ちよ
言い取らんとせるよ。出来困たらを。たれ事かま。今そ
ま小からひよまん。いざさひが事か。いく度も常の正
しさとよく守ててこそ。ものすべさ。こまかき。

上層の係辞の段と其格の交格を初り明ら下層の係辞を見合せて其言外なる餘韻を味ふべし

一段用言	四段用言	絶定言	係辞
おいみひにさ るるるるる	るむふつつく	絶定言	係辞 (ハ) (ニ) (シ)
おいみひにさ るるるるる	るむふつつく	續體言	係辞 (ハ) (ニ) (シ)
おいみひにさ れまれまれ	れめへてせけ	既然言	係辞 (ハ) (ニ)
井イミヒニキ ルルルルル	ルムフツスク	係辞	係辞 (ハ) (ニ) (シ) (カ) (ク) (ケ) (コ)
(ハ) (ニ) (シ)		譯圖	係辞 (ハ) (ニ) (シ) (カ) (ク) (ケ) (コ)
(ヤ)			係辞 (ハ) (ニ) (シ) (カ) (ク) (ケ) (コ)
(疑)			係辞 (ハ) (ニ) (シ) (カ) (ク) (ケ) (コ)

下二段用言	一段用言
うるゆむふねつつくう	うるゆむふつつく
うるゆむふねつつくう るるるるるるるる	うるゆむふつつく るるるるるるるる
うるゆむふねつつくう れれれれれれれれれ	うるゆむふつつく れれれれれれれれれ
五七九 ルルル	井リイミヒニキ ルルルルル
ワ イ テアラウカ テアラウ	

〇こののちのち

結辞

上五十八

同往既行	同竟既行	同既行	同爲有行 四体	同爾有行 三	同也行 三	同見有行 三	同來有行 二	同止有行 二	同而有行 二	受辭不有行 一	變格良屬		
											か	け	へ
二にさ	二にさ	二にさ	四にせ	三にふ	三にめ	三にけ	二にた	二にた	二にた	一にざ	か	け	へ
二にさ	二にさ	二にさ	四にせ	三にふ	三にめ	三にけ	二にた	二にた	二にた	一にざ	か	け	へ
二にさ	二にさ	二にさ	四にせ	三にふ	三にめ	三にけ	二にた	二にた	二にた	一にざ	か	け	へ
二にさ	二にさ	二にさ	四にせ	三にふ	三にめ	三にけ	二にた	二にた	二にた	一にざ	か	け	へ
二にさ	二にさ	二にさ	四にせ	三にふ	三にめ	三にけ	二にた	二にた	二にた	一にざ	か	け	へ
二にさ	二にさ	二にさ	四にせ	三にふ	三にめ	三にけ	二にた	二にた	二にた	一にざ	か	け	へ
二にさ	二にさ	二にさ	四にせ	三にふ	三にめ	三にけ	二にた	二にた	二にた	一にざ	か	け	へ
二にさ	二にさ	二にさ	四にせ	三にふ	三にめ	三にけ	二にた	二にた	二にた	一にざ	か	け	へ
二にさ	二にさ	二にさ	四にせ	三にふ	三にめ	三にけ	二にた	二にた	二にた	一にざ	か	け	へ
二にさ	二にさ	二にさ	四にせ	三にふ	三にめ	三にけ	二にた	二にた	二にた	一にざ	か	け	へ

○ことばのしらべ

結辞

上五十九

同不行	同不可行	同可行	同往行	受辭竟行	下二良屬	下二佐屬	形状用言			變格用言			
							け	い	り	ぬ	す	く	
一にず	三にまど	三にばい	二にぬ	二につ	一にらる	一にさす	け	い	り	ぬ	す	く	
ぬ	まど	ばい	ぬ	つ	らる	さす	け	い	り	ぬ	す	く	
ぬ	まど	ばい	ぬ	つ	らる	さす	け	い	り	ぬ	す	く	
ぬ	まど	ばい	ぬ	つ	らる	さす	け	い	り	ぬ	す	く	
ぬ	まど	ばい	ぬ	つ	らる	さす	け	い	り	ぬ	す	く	
ぬ	まど	ばい	ぬ	つ	らる	さす	け	い	り	ぬ	す	く	
ぬ	まど	ばい	ぬ	つ	らる	さす	け	い	り	ぬ	す	く	
ぬ	まど	ばい	ぬ	つ	らる	さす	け	い	り	ぬ	す	く	
ぬ	まど	ばい	ぬ	つ	らる	さす	け	い	り	ぬ	す	く	
ぬ	まど	ばい	ぬ	つ	らる	さす	け	い	り	ぬ	す	く	
ぬ	まど	ばい	ぬ	つ	らる	さす	け	い	り	ぬ	す	く	
ぬ	まど	ばい	ぬ	つ	らる	さす	け	い	り	ぬ	す	く	
ぬ	まど	ばい	ぬ	つ	らる	さす	け	い	り	ぬ	す	く	
ぬ	まど	ばい	ぬ	つ	らる	さす	け	い	り	ぬ	す	く	
ぬ	まど	ばい	ぬ	つ	らる	さす	け	い	り	ぬ	す	く	
ぬ	まど	ばい	ぬ	つ	らる	さす	け	い	り	ぬ	す	く	
ぬ	まど	ばい	ぬ	つ	らる	さす	け	い	り	ぬ	す	く	
ぬ	まど	ばい	ぬ	つ	らる	さす	け	い	り	ぬ	す	く	
ぬ	まど	ばい	ぬ	つ	らる	さす	け	い	り	ぬ	す	く	

ワイ

トデアラウカ
トデアラウツ

○ことばのしらべ

もろくの活言は將然言よ。下二段活佐行と相ふらび受けて他よ。然せらるる辞あり。自他活言は下小らえせ考ふべし。

○受辞。竟行のつづるつづる。下二段活多行の屬よ。續用言よ。受る辞あり。さて此つゝ竟の義。有の義よ。竟有のころあるべし。故にぬぬるぬきと相ふらびて。とづらふし。さる物事終るをさる辞あり。何れ抄ふ。たとへば紙と物と書とつけさるやうふおほさごと爲竟てもおほその何とあるとれていふ辞ありといへ。

○受辞。往行のぬぬるぬき。變格活奈行の屬よ。續用言よ。受る辞あり。さて此ぬゝ往の義。有の義よ。往有のころあるべし。故につづるつづると相ふらびうけて。おのづからさるることおほい。さる辞あり。何れ抄ふ。さる難からんとおぼゆる事のおほい。おほい。さるやうお意ありといへ。

○受辞。可行のべきべき。形状言久活の屬よ。絶定言よ。受る辞あり。何れ抄ふ。其勢いと知る小かくありてよ。おほい。さる量と定めていふ辞ありといへ。

○受辞。不可行のまどまど。不可行の反對よ。形状言志久活の屬あり。何れ抄ふ。萬葉の古點よ。不可顯あり。

ラハルマジキとよませたるも。此故か^マと^マ。こ^マも形状言^マ。

○受辞不行のずぬねのずい爲は反對ぬ^ハ。忖の義ね^ハで^マ。同トくて。無の義^マて^マ。古書ニナニ又ネノ言々。多々。とも小然有^マべきこと^ハ然有^マらぬ^ガ。如此^カク活用^ハける^マ。こ^マも形状言^マ。

○變格活良行の屬かる。け^マせて^マへ^マれ^マより^マ。マ^マる^マれ^マと受る^ハ。四段活の既然言^ハけ^マつ^マて。形状言^トと^マる^マて^マ。飽有押有打有逢有住有釣有のこ^マろ^マか^マ。こ^マに^マけ^マせ^マり^マと。運用活字^マると^ハ異^マか^マ。こ^マも形状言^マ。

○同屬かる。か^マか^マるか^マき^マ。あ^マり^マて^マら^マる^マあ^マれ^マけ^マら^マける^マけ^マら^マる^マ。形状言の將然言^ハ。久活の^マ。本語^マ。變格活良行^マ。マ^マて。活用^ハける^マ辞^マ。この故^マよ^マか^マ。い^マよ^マく^マら^マる^マ。い^マよ^マく^マら^マる^マ。その用急^マる^マよ^マか^マの^マづ^マら^マ辞^マの^マせ^マま^マる^マ。あ^マも^マ。形状言^マ。

○受辞。不^マ行^マの^マざ^マざ^マる^マま^マ。將然言^マよ^マら^マる^マす^マ。變格活良行^マよ^マら^マる^マお^マろ^マか^マる^マ。その用急^マる^マよ^マか^マの^マづ^マら^マこと^マの^マせ^マま^マる^マあ^マも^マ。形状言^マ。

○受辞來有、行の。けりけるけまハ續用言よりきてと受くる
が。變格、活良、行よわとて。さて何の義あるを。その用急お
る小よ。おのづから詞のせまきるよてももの了解するこ
とハお。故に言語四種論ハ事狀と定めえらるおと
何。因ナラハいふ紐鏡の第十三段ふるけりけるけまハ四段、活
より轉ツクとるよてこそとい異お。思ひ混マふることおられ。大
まも形狀言お。

○受辞。見有、行の。めりめるめれハ。下二段、活夜、行の。こえとい
ふ辞よ。變格、活良、行よわとて。こえ何の義あるを。その
用急ふる小よ。おのづからことハのせまきるお。さて此

辞こえ何の引合おま。眼メして見る小限カキらび心よおもい
慮ハカして然ニカからんと。大りこ小推量オモハカで定むるよいふ辞よて。
大まも形狀言お。

○受辞。也、行のおあるおまハ所謂末イハユルおあり古今集遠鏡
よ「春くまハ雁かへるお人まつむ」ハおあすおあどの
おアハ。何おある事と大およ見さしていふ詞おと
何。尚絶定言運用活字は下小いへるよ何をせ考ふべ
大まも形狀言お。

○受辞。爾在、行のおあるおまハ。續體言より受る辞の。によ
り、變格、活良、行よわとて。小何の義あるを。その用急ふる

小よ。かのづら詞のせまきるまでがこいへることと
解釋するみろをへふ。かほ續體言運用活字下よこと
まきるがごとし。まきも形狀言ふ。

○受辞。爲有行のせまきるせま。何してといふ辞の變格活
良行よとて。あてらる義あると。その用急ある小よ。
かのづらことバのせまきるふ。こまも形狀言ふ。

○受辞。既行のさし。あら。何ゆひ抄よ過る事とた。うふ
定めていふ詞か。但人よ對ひていふことば。て。たせく
ひとまごとといふとも。まづからとひまづらこれふるほ
どの心か。と。或説よ。既の義。去の義。う。上

お二つをらとせさるふ。といへ。こまも形狀言ふ。

○受辞。竟既行のてきて。う。下二段活多行の續用言
かるてよ。運用活字。さし。あら。う。つ。う。さ。ら。ける。よ。て
その義をら。い。せて。お。も。ふ。よ。て。さ。い。竟。既。て。う。い。竟。去。て。う。
竟去。既。お。る。べ。い。さて。此。辞。受。る。と。こ。ろ。小。さ。と。同。じ。さ。ま。に。相
ら。び。對。ひ。て。ま。づ。ら。ら。ふ。事。お。と。い。や。と。い。ふ。辞。か。る。こ。と。
上。か。る。受。辞。竟。行。の。下。よ。い。へ。る。が。如。し。ま。き。も。形。狀。言。ふ。
○受辞。往既行のに。さ。し。さ。し。う。い。變格活奈行の續用言
る。小。よ。運。用。活。字。の。さ。し。あ。ら。う。う。つ。を。た。ら。け。る。よ。て。そ
は。義。を。ら。い。せて。お。も。ふ。よ。小。さ。い。去。既。さ。し。往。去。さ。し。う。い。

往去レ既カふるべし。さて此辞受るところ。てきと小同トく相ふらび對ムひて。おのづうらふもつることのといふをいふ辞ふることに上ある受辞。往行の下はいへるがぶと。六も形状言ふ。

○受辞。將行のんめいレら由レひ抄ニ未然らぬ事を量分て何らましていふ詞オモふ。もづら思立オモて。いまゆりんいざかへらんといふい裏ウラふと何らんかゝらんかどいふい表オモふ。今よ。後と量ハカて此處ココよ。彼處カレコとさうまる意イふ。此義と思ひて萬葉の將字シヤウジとかけるとも。

○受辞。將竟行のてんてめい。下二段活多行の將然言シヤウゼンゴンてよ。んと受ふるが活用ハタラけるも。何ゆび抄シヤウてといふ詞の意。たとへば紙シと物モノと書つけさるやうニおほまざと爲ナして後も。猶ナホその何とあるをたていふ詞オモふ。と何る小上ある將シヤウと何いせてその意を知るべし。さててんニ右のごとく將竟シヤウゼンは義ふる小よ。ふんニ對ひて願ふ意イあると。心の中は縁がひて問かくと。二フタやうニいへる詞オモふ。

○受辞。將往行のふんニかめいレ變格活奈行の將然言シヤウゼンゴンふよ。んと受ふるが。將シヤウをかめて活用ハタラけるも。さて此ふんニ二種何ぞ。それ一ハ縁ヰがふ意イある。將然言シヤウゼンゴンよ。何うふんニかめいレその一ハ末の事シとわかめておもひやるも。詞玉緒オモ

小常れふんといへるふもふ。續用言よ。いふふんか。いふ
段活よてい。いふふん。いふふん。その受る異。いふふん。四
段活中二段活下二段活よてい。この異なることか。然もど
も上よてい。いふ下。いふこと。の意を考ふも。其。此辞てん。小相對
處よてい。か。の。づ。り。ら。こ。う。と。知。る。ふ。也。一
へる辞ふ也。

○受辞。將有行のらんらめハ變格活良行の將然言らよ。將
活よか。て。活用けるふ也。さて此らん。いうたが。いておもひ
やる詞ふ也。故。い。づ。も。見。え。た。る。もの。と。か。く。ま。さ。る。こと
こ。と。と。合。せ。て。よ。め。也。細。う。小。い。と。い。人。と。見。て。心。を。知。る。と。
木。と。見。て。花。と。おもふ。と。草。と。見。て。た。糸。と。う。た。が。ふ。との。こ。つ
ら。也。さてらん。人。と。も。う。け。心。と。も。う。け。て。結。辞。ふ。也。人。と。も

心ともららハ。てよめるも。ら。也。か。と。つ。う。と。と。省。き。て。よ。め
るも。ら。也。

○受辞。將既行のけんけめハ。續用言運用活字將然言けよ。將
將活よか。て。活用けるふ也。さて此けん。の。け。ハ。既。の。義。ふ。也。
と。或。人。の。い。へ。る。如。く。す。ぎ。た。る。事。と。た。し。う。小。い。ふ。こと。バ。お
る。が。そ。も。小。ん。の。そ。ハ。て。過。去。と。う。た。が。ひ。て。お。し。え。ら。る。こ
と。バ。お。也。

○受辞。將爲行のまし。ま。う。ハ。將の一種よて。その譯も。ウ。と
こ。ろ。得。て。た。が。ふ。事。ふ。と。さ。て。漢。文。ハ。將。字。と。ま。さ。ふ。と。よ。こ
つ。け。て。又。云。云。爲。ん。と。爲。と。同。言。の。爲。と。再。い。へ。る。と。同。ト。さ。ま

よて。必ま一ま一うと結ぶ辞の上二為者セバといふ言の所る例
古今世の中よりたえて櫻の。かうマセバ春の心ハのこと
けうら却かど例證牧舉がこと。詞玉緒小くいこと
 て此ま一の言の意ハ將為シふるべ一と。所る人のい一るぞよさ

○トハすで二運用活字の下一い一るさて此辞も徒のこ
 此結びよて。多二疑一こその係辞よてむすべる例も。まよ
 下の結辞。紐鏡ハ出されず。そハいづまの辞も上の如く
 轉ずることおけまバおマされど詞玉緒ハ例證とらまと
 あげてみとこられとマ

○ら一ハあゆひ抄おらんよマハたり小見さだめおがら

ころろかちめぬ辞お。といは。ゆる人云古くハ疑よて結べ
 る例もいまと。そハ何らトうとおもふよあマ。いり小とお
 まバ。俗言ようつて見ま。サウナといふマ何さる辞おま
 ばおマといマ。その當否ハいら小ららん未考へ孫も
 いう小ももも徒ぞころのこハ結ひとおまるがいと多く一
 て。や疑よて結べるハいと稀ニ見ゆめま。六の圖ハ略け
 詞玉緒ニ云く。何ら一から一から一から一
深りら一高らら一寒うら一かどの類ハ
まも何らんからんからんのんを活用うて一とい一へるお
まハ常のら一と同ドきグおとくかまども。常のら一ハ上の
言と離とて一つの辞ふると。上の言と離をたらとハ譬へ
行くら散るら一かどいふ行

○ニハ二結一辞

上六十七

く散るの言とら^一と^一別^まあ^さる^せい^ふ此^られ^らば^一
 上^の言^小附^たま^はら^らせ^てら^らい^上の^言ま^つさ^れた^常の^ら
 の^らい^活く^{こと}ふ^らい^云から^いの^つま^らい^小ひ^らの^つま^らい^寒
 る^辞から^いか^くあ^らい^のつ^まら^いの^つま^らい^寒
 く^有ら^いか^くあ^らい^のつ^まら^いの^つま^らい^寒
 も^から^いも^あら^いも^同ト^例あ^るま^で○重^胤云^く此^三つ^ハ
 と^もよ^變格^活良^行の^將然^言ま^すう^くい^さら^異か^りさ^れ
 る^のよ^まて^なづ^ての^事ま^はあ^らば^一い^さら^異か^りさ^れ
 と^てよ^まて^なづ^ての^事ま^はあ^らば^一い^さら^異か^りさ^れ
 と^てよ^まて^なづ^ての^事ま^はあ^らば^一い^さら^異か^りさ^れ
 ○け^らい^ハ詞^玉緒^よこ^まは^けり^{ける}け^きの^活さ^たる^よて^ハ
 右^のら^らい^かど^の格^と
 と^同ト^けま^{ども}下^のい^ハこれ^のい^んと^活く^事あ^らん^然ま^は
 本^よま^らい^とハ^別あ^る辞^おと^志る^され^とで^かは^續用^言
 右^のら^らい^かど^の格^と
 右^のら^らい^かど^の格^と
 右^のら^らい^かど^の格^と

運^用活^字下^二い^ハ合^せ考^ふべ^し
 ○ふ^らい^ハ小^あら^いの^引合^ある^{こと}ら^いの^下二^いへ^るが
 ぶ^とく^變格^活良^行の^將然^言あ^らら^いと^つづ^けさ^る辞^お
 ○つ^とい^ハ詞^玉緒^よこ^まは^けり^{ける}け^きの^活さ^たる^よて^ハ
 つ^るつ^との^二種^ので^さて^その^て小^通ふ^つと^ハ何^ゆい^抄
 小^中の^つと^いへ^るこ^まま^て^古今^物毎^に秋^ぞ悲^しき^紅葉^限を^思
 一^ハ同^山里^ハ秋^こそ^この^小ま^びけ^き鹿^のあ^く別^あで^こ
 絲^目と^さま^しつ^ふお^とら^るた^ぐい^へて^別あ^でこ
 く^小ら^げさ^るい^ハ所^謂下^二意^を合^めて^言ひ^すつ^つと^て
 何^ゆい^抄末^のつ^とい^へる^とい^ハ故^上へ^かへ^らば^一

いひすてたる隨まて。言外ま含蓄せる意味有る也。いひ下またる事の意を得てさとするべし。

○かふい。運用活字は下ま言いへるが如く。もとかといふ詠め
みとみばみ小みふみとももともみ歎たきたる辞まとそへたるみふみふみるみく
いみかみもとみのみいみへみ。さてそのかみとみ濁みてみがみかみがみもと
とみぢみむみるみ辞まらみ。詞ま玉ま緒ま。おほよみそもみがみふみとみつみづくみとみさみい。
すみべてみがみ濁みてみ願ねふみ意みのみ辞まふみ。古今かかくみつみつみとみふみも
八千代は。逢あふみてみ。がみふみいみ。とみ濁みてみ願ねふみこみろみふみ。拾遺
よよいよもよがよふよ。折まるよるよるよ。志まがよかよとよ。金葉あ秋あからよて。妻呼あふよ鹿
のよ。月よのようよつよらよもよ。折まるよるよるよ。志まがよかよとよ。金葉あ秋あからよて。妻呼あふよ鹿
家あのよ。風あとよふあふよせてよ。志まがよかよとよ。金葉あ秋あからよて。妻呼あふよ鹿
聲あのよ。身あよあ。ふあ。志まがよかよとよ。金葉あ秋あからよて。妻呼あふよ鹿
志あむありあとあ。志まがよかよとよ。金葉あ秋あからよて。妻呼あふよ鹿
濁あ赤

衛門集「やこ出て今日九日あふあであもあがあこあまあいあ常あのかあふあと
けあであ。とあらあうあのあ末あ。至あるあふあがあふあもあがあこあまあいあ常あのかあふあと
かあとのあこあもあいあふあ如あくあ。願ねふあこあろあのあがあふあとあのあこあまあいあ常あのかあふあと
もあ。片あ戀あいあ。昔あしあこあもあのあ人あとあ志あがあこあまあいあ常あのかあふあと
があ嶺あとあ。さあやあふあもあ見あらあるあ。さあやあのあ中あ山あ。志あがあこあまあいあ常あのかあふあと
ふあくあ。横あがあ。伏あせるあ。さあやあのあ中あ山あ。志あがあこあまあいあ常あのかあふあと
まあ。君あとあ。光あのあ間あ。志あがあこあまあいあ常あのかあふあと
さあ分あてあ。見あるあ。もあがあこあまあいあ常あのかあふあと
目あかあづありあんあ。古あ今あ。甲あ斐あがあ糸あとあ志あがあこあまあいあ常あのかあふあと
人あ小あもあ。やあこあ。志あがあこあまあいあ常あのかあふあと
とあ傳あてあ。やあらあんあ。志あがあこあまあいあ常あのかあふあと
はあもあがあふあがあふあ。志あがあこあまあいあ常あのかあふあと
ふあ。とあらあるあ。此あのあ圖あ。はあ出あさあ糸あどあもあ。一あつあのあ結あ辞あふあまあバあ因あと
いあふあのあこあ。

○こころのちのつらら 結辞

○受辞而有行のたてたるたまは續用言運用活字ふる。てよ
て變格活良行小とて。て何の義ふる。それ用急ふる
小よ。かのづらふとバのおまるか。これも形状言か。
○受辞止有行のたてたるたまは。體言運用活字ふる。とよ
變格活良行とたてて何の義ふる。その用急ふる小
よ。かのづらふとをのせまれるか。これも形状言か。
さてこの而有止有の二行とも小。上ふる不有の下來有の上
よ。ゆるべと。記さもらせ。ゆゑよ。小のけと。

留よ上へかへる辞

詞玉緒小云く。すべてて小をいれ辞よ。留よ上へかへる
歌ハ、何きもよ其留よて小をいの必上のことバの切
るゝ所までへ。かゝるやう小よむことか。云然る小後世
よ。此格と知らで。留よて小をはの或ハ初句は詞かどへ
の係で。其よとバのさるゝ所までへかゝらぬ歌の多
さ。いよふひが事か。とれは詞へかゝらぬも難小。ら
ず。たゞさるゝとみらまでへかゝらざれば。一首の趣とこの
とびと知るべ。と何てその證例を舉られと。さてその
とまよ小ゆる辞のハ。古今よその戀や渡らる白山のば
○このづらうまら 追加
上七十

古今のこで無く散るぞめでたき櫻も拾遺くむ違ふとく行て
花はアて世の中を古今たきけりもとめ折つる物に古今
十市の里の住を古今たきけりもとめ折つる物に古今
ううアつるも古今たきけりもとめ折つる物に古今
色はうつるも古今たきけりもとめ折つる物に古今
身世ふるも古今たきけりもとめ折つる物に古今
小家路で古今たきけりもとめ折つる物に古今
忘きでて古今たきけりもとめ折つる物に古今
身ハ老や行む年へね古今たきけりもとめ折つる物に古今
身ハ新古今君が代ハ限もつらと長濱も後撰そま千鳥う
どもみ濱の真砂ハよとつらと長濱も後撰そま千鳥う
まも無き人の河さよとつらと長濱も後撰そま千鳥う
ハ啼さわさまどとつらと長濱も後撰そま千鳥う
まで拾遺忍ぶまどとつらと長濱も後撰そま千鳥う
問ハんもち葉のふらかものらら古今秋あらで逢ふ事か
くハて道と見あがらかものらら古今秋あらで逢ふ事か
ほうとまれぬもの色古今秋あらで逢ふ事か
思ふものうらぬもの色古今秋あらで逢ふ事か

古今別きやハ山のさくら小まらせ
てとめんとめトハ花のまに
おもどまアかほ此外
おも例おほるべし

重なる辞の格

詞玉緒云くそとぞのや何みそと重なる事を採多
その時をもハ軽くそのや何ハ重なる故もさ方格にて
むすぶふアとアそハ一例といとどは古今かく山のも
秋ハうあしきも古今入と思ふ心木の葉有らばかく如
くふア餘ハみ小准らへて心得べし。○同書小二重よと
みふる辞はアそとぞと何とぞと何とぞと何とぞと何とぞ
とやとあどまアその一例といとどぞとや後撰志のくわ
飽うで別き一た

〇こころのうらみ

上七十一

もとのぞつや別けそ何拾遺新アとぞいからんとい思
し人のとがむる新葉六ふけ氷る霜夜の月ぞ秋やお何新
けそとふそとて時こそ有れとさやけうアけやと何古
今うけがたさ人のすうさ小ううびとそとや中務集花と
出てこそアすやたまも又しづむうびとそとや中務集花と
てどがめうかかすからこまられ外よおほらまた有るべし
ぬ身といろよかおせんこまられ外よおほらまた有るべし
如此く二重小むすべる辞ハかさおアたる方ととくうけて
下小つゞくる例おア。

本歌よゆづる格

詞玉緒よ云くおまハ何の辞とおきて。それ結辞とバ本歌
小もつアておぶける格おア。新古今梅は花たが袖觸きし句
ひぞと春やむうしの月よ問ハむや。同面影ハ霞める月ぞや

とアける春やむうしれ袖のおまは。此二首ハ古今ある月
お春からぬ我が身ひとつハ本の身かして。といふ歌の受と
首のころろと春やむうしといふことバは。おえての受と
おおもしよて。そのころろららら。おまて。やの同君が代
むすびとも本歌よゆづアておぶけるものおア。同君が代
小阿いずハ何と玉の緒の長くとまでハ惜まれト身と。これ
今戀一。か糸とみるとかかさよアうけて阿はずハ何と
玉の緒よせん。といふと本歌よて。君が代は。阿はずハ何と
お緒よせん。その玉緒の長くとまでハ惜まらるまト身おる
もの。といふことバは。これ。何のむすびとバ本歌よゆ
づアて。本歌のことバは。これ。何のむすびとバ本歌よゆ
めて。のと受けとることバは。これ。何のむすびとバ本歌よゆ
づける格ハその本歌と知らでハ。辞おろ得がさうるべく。
又いまおぼろけお人およむべき物おも阿らば。よくせげべ
心得がたきえせ歌よおアるんうしと阿ア。

○ことばのらうとら 追如 上七十二

動うぬ言よて結ぶ格

詞玉緒小。うごうぬ言よて結ぶ格とて出されと。またハ體
言とめともいふ。此ハ徒^レも。そ^レや疑^レても。こそ
よても皆とまて。趣意落著する。その何故^ト體言よて
留るぞとわつぬま。皆其體言下よとバれこ。て。
其のこ。たれる詞よて留る。あ。けり。それ残る。と。バといふ
ハ。は古今青柳と片糸に上。て鶯のぬふてふ笠^ハ梅の花が
さ。これハ。ぬふてふ笠ハ梅の花笠^ハといふことよて花笠
し。下よ。あ。といふ辞を加へて。あ。う。て。後よ。と。ま。る。あ。
も。續古今。明石瀉^トま。と。かけて見渡せば霞のう^ハも。沖つ
白浪。これハ。あ。の。こと。ハ。徒^レこれ^ハ。異^レふ。れ。ど。體言留^レの。下。よ。辞

とそふる。い。後撰。いたふる。と思ひあわびぞふる。さる。人
同。格。あ。い。後撰。いたふる。と思ひあわびぞふる。さる。人
あ。こ。ろ。い。ろ。ま。ぞ。世の常。これハ。あ。の。辞。や。古今。谷風。解
る。氷のひまごと。小。打出る浪。や。春の初花。これハ。あ。の。こと。
疑。新古今。岩根ふも重なる山と分け捨て花も。い。く。重の。い。と
み。白雲。これハ。あ。の。こと。ハ。大。新勅撰。よ。い。來。夢路の
や。と。出ぬま。バ。色。と。春の墨染の袖。これハ。あ。の。こと。ハ。
あ。ま。ら。け。う。い。づ。も。その體言。よ。て。と。ま。と。る。下。よ。畜
せる意。あ。て。は。も。徒^レの。係辞。ハ。時。ハ。あ。の。辞。の。省。り。と。る
あ。ぞ。や。疑^レの。係辞。の。時。ハ。あ。の。辞。の。と。ぶ。り。と。る。あ。ぞ。
その係辞の時ハ。あ。れの。辞。の。と。ぶ。り。と。る。あ。れ。バ。い。づ。も

○ことばのらうまら 追加 上七十三

紐鏡まゝ用言〓 小わいせて〓 きてあるおれの辞〓 補オキナひ加へたる心もちひ
まてとぢむるおととるべし。

いひかけまて結ぶ格

詞玉緒小。此一列で出されとて其〓はも〓徒〓の〓も〓有〓が〓疑〓
こそおどいづれの係辞まても有る事小で。多くハ用言と言
ひうけて下れ體言〓わいせさるが。ろの係辞小よて結ぶ
おころの意味も大よかハる事小で。たとへハは新古今世の
中とそむれまとしてハ来〓うどもおほう〓に事〓お〓原〓の里〓
これ〓の〓係辞〓あるも〓お〓お〓結〓ぶ格〓も〓後撰〓お〓も〓や
ると地名の大原の里〓は〓ひ〓う〓け〓さ〓る〓お〓も〓
このゆくもかへるも別〓を〓つ〓く〓知るも知らぬ〓も〓わ〓ふ〓坂〓の〓關〓

これハもの係辞〓あるも〓お〓わ〓ふ〓と〓結〓ぶ格〓ろ〓千載〓雪〓から〓バ
おると地名〓わ〓ふ〓坂〓ハ〓ひ〓う〓け〓さ〓る〓お〓も〓
史垣小の〓ハ〓つ〓も〓ら〓ど〓と思〓ひ〓と〓く〓小〓ら〓ぎ〓く〓れ〓花〓これ〓
み係辞〓ある故〓は〓お〓ら〓る〓と〓む〓す〓ぶ格〓も〓後拾遺〓わ〓ぢ〓さ〓お〓
る〓と〓お〓ら〓ぎ〓く〓れ〓花〓お〓ひ〓ひ〓う〓け〓さ〓る〓お〓も〓
く思〓ひ〓こ〓ろ〓や〓れ〓つ〓き〓と〓獨〓や〓わ〓お〓の〓山〓吹〓の〓花〓これ〓ハ
辞〓あるゆ〓え〓よ〓わ〓る〓と〓結〓ぶ格〓も〓疑〓金〓葉〓わ〓ら〓る〓神〓も〓
地名〓の〓わ〓で〓ハ〓ひ〓う〓け〓さ〓る〓お〓も〓疑〓金〓葉〓わ〓ら〓る〓神〓も〓
うれ〓し〓と〓笠山〓二葉〓お〓松〓の〓千代〓け〓け〓れ〓の〓辞〓ハ〓上〓ハ〓疑〓
と結ぶ格〓あると〓地名〓の〓こ〓ろ〓新古今〓さ〓夜千鳥〓お〓ま〓こ〓そ〓
と山〓ハ〓ひ〓う〓け〓さ〓る〓也〓こ〓ろ〓新古今〓さ〓夜千鳥〓お〓ま〓こ〓そ〓
近く〓お〓る〓海〓が〓さ〓か〓と〓お〓く〓月〓小潮〓や〓つ〓ら〓ん〓これ〓ハ〓こ〓ろ〓の
小〓お〓ま〓と〓む〓す〓ぶ格〓あると〓地名〓の〓お〓ど〓れ〓如〓く〓その係辞〓まて
の〓お〓ら〓と〓小〓い〓ひ〓う〓け〓さ〓る〓お〓も〓お〓ど〓れ〓如〓く〓その係辞〓まて
むすぶ格〓の用言〓と〓その下〓お〓る言〓ハ〓い〓ひ〓う〓け〓さ〓るものおで。

○右ハ結辞ニ屬けるもろくの定格と記せるか。さて上
小かくれどとくらげさるハ。ほらゆる結辞のかぎであるも
のから。それと見かからづうら用ひんとするハ甚ト強
事ふるべし。歌小まれ文よまれ作意ハ。各隔ふるものかまへ。
おのくつらひおれさる辞とづう小三つ四つハ過ざる
ものか。それ語勢小ひくれ。その辞のよまくる小随ハ。その
旨趣小相叶へくものすべさわざか。

